

人に「嫌われる」方法 — 蓑田胸喜に学ぶ。

人類史の理想は、西洋・東洋両文明の統一と融合である。

この誰も否定しようのない平凡な建前論から、「原理日本」を足場に、「日本人の自我の内」に、「世界は在る」と叫びながら、「一気に「世界文化単位」の高みに駆け上ったのが、蓑田胸喜（みのだ・むねき、1894-1946）であった。蓑田が疾駆した「しきしまの道」には、美濃部達吉と天皇機関説、大川周明の『日本二千六百年史』、ヒトラーのナチス党、マルクス主義、東京帝国大学法学部の民主主義思想、近衛文麿の政策研究会である「昭和会」の思想家たち、農本主義の権藤成卿、民本主義の吉野作造、瀧川幸辰、西田幾多郎、牧野伸顯らが、死屍累々と横たわっていた。漱石の『門』で、宗助が聴かされた蛙夫婦の受難の光景を思わせる。

蓑田は右も左も見境いなく、国の内も外もお構いなしに、目に付くもの・耳にするもの・手に触れるものごとくを、叩きのめし踏み潰していったように見える。批評や批判と言った生やさしいものではなかった。昭和10年の『美濃部博士の大権蹂躪』による美濃部達吉（1873-1948）への攻撃では、

天皇の統治—立法・思想・行政・統帥の大権を挙げて悉く蹂躪滅却し、不敬罪国権紊乱罪を犯せる変節改論詭弁詐術至らざるなき自己悖逆の無良心無節操——美濃部氏の如きを（……）何人か人権蹂躪の事実なしと断言し得るか？といひたい。

思いつく限りの悪口雑言を並べたてている。だがこれほど文字数が費やされていながら、罵詈雑言に終始するばかりで、かんじんの美濃部のどこに非があるのかは、わからない。おそらく美濃部は詰られていて理由を問われても、首をかきしげるしかなかっただろう。今となっては経緯のわかっている私にも、これだけでは理解できない。

実はこの年の1月3日、満州事変に関する「現代政局の展望」と題する美濃部の論説が、東京朝日新聞に掲載されていた。

満州事変が起こるまでは、政治の中心勢力が政党にあることは、争ふべからざる所であった（が、現在は）これに代つて政治の中心勢力をなすものは、いまだ結成せられていない（……）結局は政治の中心勢力をなすものが全く失はれて、何処に中心を求むべきか定まらないが、今日の日本の政治の実状であることは否まれない。

文意からすると、美濃部は「憲政の常道」を支えていた政党政治が弱体化したことで軍部が台頭し、満州事変が引き起こされたと憂えているのだが、蓑田はその分析に自体に、異を唱えているわけではない。内容以前の「政治の中心勢力」の「不在」という文言に、我慢がならないのである。

蓑田は二十歳も年上の大憲法学者、貴族院議員の美濃部を、頭ごなしに怒鳴りつける。

「万世一系の天皇之を統治」させ給ふ大日本帝国に現在「政治の中心勢力をなすものが全く失はれて、何処に中心を求むべきか定まらない」といふのは、上御一人「天皇統治大権」の天日の如き厳肅實在を無視否認し奉りたる思想の大逆言辭である。

そして、舌なめずりをして、こう付け加える。あるいは美濃部は言うかもしれない。それは言葉尻を捉えた非難に過ぎず、天皇に大権があることぐらいは分かっている、その大権を直接補助する主体者を便宜的に「政治の中心勢力」と呼んだだけだ、と。蓑田は美濃部の言ってもいけない弁解を先回りして、次のように吐き捨てる。

かゝる遁辭こそ実に美濃部氏がその常習犯たる自他を瞞着する道德的並に學術的無良心無節操の詐術的詭弁である。

美濃部の額にべたりと詭弁の常習犯のレッテルを貼りつけた蓑田は、「それを先づ実証しよう」と、朝日新聞紙上の論説中、「政党勢力の強みは（……）憲法上の制度それ自身に在る」や「議会の主たる勢力は衆議院にあり」「衆議院は専ら政党の勢力の下に支配せられている」を論（あげつら）い、ワイマール憲法ならいざ知らず、我が帝国憲法のどこにそんな規定があるのかと詰め寄り、美濃部の『憲法提要』や『逐条憲法精義』に現れる「天皇機関説」に照準を定めていくのである。

蓑田の『美濃部博士の大権蹂躪』が2月5日に発行されると、同月18日、貴族院の本会議で、蓑田の非難をトレスするような美濃部批判の演説が行われた。美濃部の学説を排撃し、美濃部の諸著作を発禁にする「天皇機関説」事件は、こうして始まった。